

Title	<書評> ANTONIN ARTAUD 『L'ARVE ET L'AUME TENTATIVE ANTI-GRAMMATICALE CONTRE LEW'IS CARROLL』 ŒUVRES COMPLÈTES 9, Éditions Gallimard, 1971 & 1979
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	年報人間科学. 2006, 27, p. 63-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25893
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ANTONIN ARTAUD
『L'ARVE ET L'AUME TENTATIVE ANTI -
GRAMMATICALE CONTRE LEWIS CARROLL』
ŒUVRES COMPLÈTES 9

Éditions Gallimard, 1971 & 1979

山 森 裕 毅

1.

アルトールはロデーズで療養中にアンリ・パリゾに『鏡の国のアリス』を翻訳してみないかと持ちかけられたが、アルトールは結局翻訳しなかった。『L'ARVE ET L'AUME ルイス・キャロルに対抗する反・文法的試み』は『鏡の国のアリス』の第六章「ハンプティ・ダンプティ」を変奏したものであるとアルトールはいう。詩の部分以外はアルトールの使う語句がやや難解という以外に大きな違いはなく、キャロルの忠実な翻訳になっているが、アルトールは詩を大きく書き換えている。ひとつは Jaberwocky の詩であり、もうひとつは海と魚についての詩である。なぜアルトールは詩を書き換えたのか？

2.

アントナン・アルトール(1896〜1948)が衝撃を持って迎え入れられた時代は過ぎ去ってしまったが、だからこそ冷静に彼が私たちに何を問いかけたのかを見届けることができるし、彼固有の異様な体験を語ろうとする明晰な言語表現はまったく色褪せていない。この書物は、アルトールの死後の刊行物であり、ポール・テヴナンが編集するアルトール全集の9巻である。主となるのはメキシコ旅行記として書かれた「タラユマラ」と「タラユマラに関する手紙」であるが、ここでは触れない。要約すれば、思考の腐食というアルトールに固有の体験の下に為された詩作、演劇(アリフレッド・ジャリ劇場

と残酷演劇)、映画がごとく興行的に失敗に終わった。会話を中心とする心理劇が一般的だった西洋演劇に対して、身振りや音響、照明によって空間を満たすアルトの演劇は、奇抜以外の何者でもなかった。自分の作品に理解を示さない西洋文化への嫌悪から、異邦へと新たな展開を求めてメキシコに旅立ち、タラユマラ・インディアンに思考に触れる様子を描いている。例えば、タラユマラ・インディアンは儀式のときに神と出会うためにペヨトルと呼ばれる麻薬を服用するのだが、それを服用したいがために彼は病気を抑えるために常備使用していた麻薬をやめる。しかし、タラユマラの郷を目指す途中、その反動としての幻覚と疲労に襲われることになる。その旅程を描いた「記号の山」は、アルトの思考、タラユマラの神話、幻覚と体験と記憶が区別なく入り混じり、異様な記録となっている。「タラユマラ」について読みたい方は、邦訳が出ているのでそちらを当たられるとよいだろう。

ここで扱うのは、ロデーズの精神病院で療養中に書かれたルイス・キャロルを巡るテキスト「ある主題に関する変奏 ルイス・キャロルに倣って」[LARVEとLAUME ルイス・キャロルに対抗する反・文法的試み]、「ロデーズからの手紙 1945年9月20日」、「ロデーズからの手紙 1945年9月22日」についてである。

3.

なぜアルトは詩を書き換えたのか？ただただ素朴な私たちの問

いに対するアルトの返答も素朴だ。それは「いらいら」するほど「嫌いなもの」だったからだ。しかし、ことは好みの問題では終わらない。

アルトがキャロルについて持った印象は次のようなものである。「ルイス・キャロルは鏡の中で見るように彼の自我を見たが、彼は現実の中ではこの自我を信じなかった、そして彼は鏡の中を旅することを望んだのだ、彼自身の外側で自我の亡霊を破壊するために、それは彼の身体そのものにおいて破壊するよりも前にであるが、しかし彼がその自我の分身を削除したのは彼自身にとっては同時であった。」

キャロルは鏡の中から自我を見るような人物であり、鏡の中から現実の自我を破壊してしまおうとする人物である。そしてそれはキャロル自身の現実の身体も鏡の中から同時に削除しようとする。キャロルは倒錯者であり、「知覚と言語活動の先天性暴徒の一種¹¹」であるとアルトには思われる。そしてこのような倒錯は詩を読むことにおいて為されるのである。しかし、それはいったいどのような事態なのか？

キャロルが書いた詩とアルトがそれを変奏した詩を比較してみよう。

キャロル

Jabberwocky

Twas brillig and the slithy toves

Did gyre and gimble in the wabe

All minsy were the borogoves,
And the mome raths outgrabe.

(ゆゑまたまたにぞ めめぬらとおお
こひのさたぢや こひかしのぢや
うたつこひれたるほろごおお
そかりたるらあすぞひせなる)

アルトー:

NEANT OMO NOTAR NEMO

"Jurgastri—Solargultri

Gaba Uli—Barangouniti

Otar Ufi—Sarangmumpiti

Sofar Ami—Tantar Upti

Momar Uni—Septfar Esti

Gompar Arak—Alak Eli."

Il était Roparant ,et les viqueux tarands

Allaient en gilroyant et en brimbulkdriguant

Jusque-là où la rougrhe est a rouarghe a rangmbde et rangmbde a
rouarghambde :

Tous les falomiards étaient les chant-hnants

Et les Choré Ukhatiss dans le GRABÜG-FÜMENT.

Jabberwocky の詩はハンブティ・ダンブティの言うように、ひとつの言葉の中にふたつの意味を詰め込んだかばん語でできた詩である。例えば Brillig は、夕飯を炊き始める (begin broiling) 時間

つまり夕方の4時のことである。アルトーの場合では Roparant が、夕食のために食べ物をロースト (rôti) するための準備をする (pare) 時間として同じく午後4時を意味する。

Jabberwocky の詩を巡るキャロルとアルトーの関係をドゥルーズは次のように分析している。「アルトーが翻案した「Jabberwocky」の最初の説を見ると、始めの二行はまだキャロルの基準を満たしているのがわかる。：しかし、2行目の最後からそして3行目の最初の語から「ずれ」が生まれる。中心となる部分で創造的な崩壊が生じているのだ。そして僕たちは別の世界、まったく別の言語のうちにいることを感じる。：キャロルの言語は表層から発せられているが、アルトーの言語は身体の奥深くに刻み込まれている」。

ドゥルーズは、アルトーの変奏が意味の下にある深層の身体に基づいて為されているという。そこに書かれている言葉の意味とはまったく関わない次元で行われる、息を吹き込むという行為、息と叫びの言語である。例えば Ukhatiss について、アルトーは次のように解説している。「それは ukase (至上命令) hate (はやる気持ち) として abrunit (愚か者) cachot nocturne sous Hécaite (くかテーのもとでも夜の独房) の省略された言語を縮約したものだ、つまりますますな道の外に投げ出された月夜の豚だと言いたいのだ」¹¹。ドゥルーズはアルトーの Choré Ukhatiss は、キャロルの mome raths とは違う規則に従ったかばん語であると分析している。アルトーは「語を能動化し、語に息を吹き込み、湿らせ、燃え上がらせている。軟音記号(母音を、つまりアポストロフに還元したものを)を使って、語と

一体となった子音、分解できない子音にしてしまうのである。：意味によってセリーを分岐させようとするのではなく、反対に意味の下の領域において、アクセントと子音の要素の間で、連想の連鎖を働かせる。利用する原則は流体で燃える原則であり、意味を作り出した瞬間から、意味を効果的に吸収し、消滅させてしまうのである。Ukhaiss とは KH (cachot) KH (nocturne) HKT (Hécate) なのである。」

意味の連鎖によってかばん語を作るキャロルに対して、アルトールはアクセントと子音の要素の連鎖でかばん語を作る。この二種類のかばん語は従う規則が異なる。キャロルは超越論的な意味の規則に従うのに、アルトールは深層の身体の規則に従う。アルトールは、受動的なばらばらになった身体と能動的な器官なき身体とによってかばん語を作る。ばらばらになった身体とはアクセントや子音、すなわち息(息継ぎ)であり、器官なき身体とはかばん語、すなわち叫びである。叫びというひとつの持続するブロックの中に息という骨組み・リズムが組み込まれている。そこではもう言葉の意味は問題にならない(ナンセンスだ)。以上が、息、叫び、身体などアルトールに固有のキーワードを駆使したドゥルーズの卓抜な読みである。

確かにドゥルーズを超える読みをすることは難しいだろう。しかし、違和感はないだろうか。あまりに単純なので逆に怖くなってしまふほどの質問をドゥルーズにしてみよう。私たちは Ukhaiss を叫ぶことなく発声できるのはなぜか？ドゥルーズの議論に従うならば私たちは Ukhaiss と発声する限りその全てが叫びになることになる。

またアルトール流のかばん語でなければ私たちは叫ぶことができない。しかし、アルトールが叫びという問題を受け継いだのは、「9月20日」、「9月22日」の手紙にもあるようにボードレルやエドガー・ポーによってであり、彼らはかばん語を駆使した詩人ではない。またアルトール自身の作・演出した『神の裁きと訣別するため』の録音を聞く限り、彼らはかばん語とは無関係に叫びを上げている。そういった事実をドゥルーズの読みでは扱えない。

だからといってドゥルーズの読みに価値がないわけではない。アルトールの分析から受動的な身体と能動的な身体を見出したこと、意味とは関わらない身体の次元を見つけ出したことは重要である。受動的な身体とは比較的理解しやすい概念である。例えばベルクソンが『物質と記憶』の中で言っているように、私たちは未知の言語を聞く場合、その言語についての運動図式をまったく持たないために何を言っているか分節して聞くことができない。耳に運動がついていけないのである。もちろん発音することもできない。舌にそのような運動が記録されていないからだ。私たちは言語を己の身体に刻み込むことで使用することができる。そして逆に能動的な身体とは、赤ん坊の泣き叫ぶ声である。何で読んだかすっかり忘れてしまったが、赤ん坊はあらゆる声で泣き叫ぶことができる。その身体に運動が記憶されていないからだ。そしてアクセントや息づかいによって身体をばらばらに刻まれてしまった後は、二度と赤ん坊のように叫ぶことはできない。しかし、赤ん坊のようにもう一度泣き叫ぶことができるのではないか、そのような潜在性を身体は持っているの

はないか、これがアルトールとドゥルーズに共通する観点であるように思う。またドゥルーズの『意味の論理学』における身体論で重要なのは、キャロルとの比較よりもライプニッツのモナド的身体との比較である。ライプニッツ哲学において、その身体とは、神が作り出した表現される世界をその身体に映し出して表現するものであるが、それをアルトールが『神の裁きと訣別するため』において「神の微園」が入り込んだもの、あるいは器官によって束縛されたものとして批判される身体のように読むことができる。そこでアルトールは器官なき身体を主張し、自由の問題を提示するのである。ここでは神からの自由、表現からの自由が問題になっているのである。ドゥルーズはライプニッツの身体を明暗のある身体と呼び、アルトールの身体を輝ける栄光の身体と呼んで比較を試みているが、詳しくはここでは触れないことにする。

叫びの問題に戻ろう。私たちが問題にしたいのは、叫ぶためには言葉と身体の間でドゥルーズとは別の論理があるはずだ、そしてそれはアルトールが詩を書き換えた理由と関係があるだろう、というものである。

キャロルはアルトールにとっては鏡の中から現実の自我と身体を削除するような詩人であるように思われると書いたが、それはキャロルの詩にどのように反映しているのだろうか。アルトールのキャロルの詩に対する評価は次のようなものである。「装われた幼児性が現れてくるこの詩を私は決して愛さなかった。私は湧き出てくる詩を愛しているのであって、推測される言葉を愛してはいない。私は書

いたり、読んだりするとき、魂が勃起するのを感じたのだ……私は表面の詩や言葉を愛してはいないし、幸福な余暇や知性の成就を呼ぶ詩を愛してはいない。……Jabberwockyには魂が存在しないのだ……Jabberwockyはよく給支された食事をたっぷり食べた作品を、他人の苦痛を貪り食いたかった便乗者の作品である。Jabberwockyの詩には糞便性の通過があるが、それはイギリス人スノップの糞便性であり……というのもJabberwockyは味気なくされ、私によって書かれた作品のアクセントがない盗作ではない、そして私自身が苦痛によって内側にある何かを知るといった類のものが消滅した作品ではない」。言葉遊びに戯れる幼児性、言葉が言葉へと横滑りしていく表面性、暇に任せ知性に訴えるブルジョワ性、他人の苦痛や作品を食べ、栄養を奪い、糞として出す糞便性。挙句の果てにはアルトールの作品のアクセントの欠けた盗作であるとまで言う。キャロル自身が鏡の中にいるためにその詩は話し言葉だけが存在する精神的な不在の空間である。そこには身体が存在しない。

アルトールはキャロルを擁護するかのように「書かれた全ての作品は鏡だ」という。しかしそれは「書かれなかったものを前にして溶けていくような鏡」である。アルトールの論理は単純である。「ある詩人の作品を読むのは、全体を通して読むよりも前だ」という。ここでいう詩人の作品とは書かれたものであり、全体とは書かれなかったものまでも含む詩であるだろう。そして後者の読むには朗読するという含意がある。朗読するということは、書かれたものに息を吹き込むということ、息を吹き込むとは身体を通過するというこ

とである。「この詩の中にはいくつかの限定的段階がある。その段階とは思考の中で開花する以前に語・物質を通過する場所によるものである、そしてその錬金術の操作、いわば唾液の状態の段階である、唾液の段階とは彼ののどの奥にいる詩人が話し言葉に、音楽に、内的テンポの変奏に被らせるものであり、それは朗読者のための物質状の嘔吐「反復朗唱」の前に被らせるものである」¹¹¹。

詩というのは書かれた状態で完成するものではない。それは朗読を必要とする。朗読する限りで詩は身体を息や唾液や舌などの書かれなかったものを否応なしに巻き込む。だから書かれたものには書かれなかったものが鏡のように反映していなければならない。しかし、キャロルの詩には身体が掘り込まれていないのだ。それがアルトローをいらいらさせる。

「私たちはキャロルの主題について夢見ることができ、変奏をうまく制作することができる、しかし常によこしまな自我の理念がぞつとするような嘔吐のように私たちに帰ってくる、そしてそのときついに私たちはこの非・自我を発見する、それは私たちが私たちをついにそして純粹に私たちそのもののように見るところのものであり、言い換えれば永遠の鏡の底にいる処女である」¹¹²。

キャロルのように鏡の中から詩を書くことはアルトローにもできる。しかしアルトローがそうするとき朗読という物質状の嘔吐がアルトローを鏡の中から引きずり出す。そのときアルトローはそこに書かれたものが、まったく私のものであるように見えながらも自分のものではないことに気づく。身体が不在であるがゆえに永遠に処女であるような

書かれたものは、書かれなかったものが存在しないために、朗読することができない。朗読することはキャロルの詩から遠ざかることを意味することにアルトローは気づいている。だからこそアルトローはキャロルの詩に身体を書き込もうとする。しかし、詩に身体を書き込むとはどういうことか？「人はその言語を發明することができ、文法の枠を超えた意味によって純粹な言語を話させることができる、しかしその意味はそれ自身で根拠のあるものでなければならぬ、言い換えればそれは恐怖に起因しなければならない」¹¹³とアルトローが言うように、身体を書き込むことは、恐怖を書き込むことである。これをもっと広く情動を書き込むことだといえるだろう。情動を書き込まれた言葉によって私たちは身体的な叫びや嗚咽、ひいては歓喜まで呼び起こされるであろう。そして、そのとき身体を持たない鏡の言葉は消え去り、身体を持った分身としての言葉が生まれるだろう。ここまで来て、ドゥルーズの議論に立ち返るなら、彼の叫びの理論は、アポストロフィや文字に依存し、恐怖などの情動に依存しないという意味でアルトローの叫びを説明できていないのである。叫びが、言葉の意味に還元できない息や唾液などの物質の流動性を表しているとしても、情動がなければそのような流動は起こりえない。そしてその情動を生み出すのが身体なのだ。これがアルトローの主張であり、ドゥルーズがアルトローに対して見落とした点ではないだろうか。

「全ての書かれたものは豚のように不潔だ」¹¹⁴と言ったとき、アルトローが批判したのは、書かれたものを自分のものだと主張すると

いうことに対してであった。「全ての書かれたものは鏡である」と述べてより明確になったことは、書かれたものと書かれなかったものが、非・自我と自我という関係のもとで自己同一性を形作っていることに対して批判が向けられているということである。自分と自分でないものを同一視するのではなく、自分自身を作り出すこと。分身を作り出すこと、そしてその分身が自分とは関係なく自立すること、それがアルトの主張であった。その意味でキャロルは、アルトにとって、鏡の中に閉じこもり自己同一性へと回帰しない異様な存在であったといえるだろう。

注

- i アントナン・アルトオ、『タラユマラ』、伊東守男訳、ペヨトル工房、1981年
- ii しかし、出版社のペヨトル工房自体がつぶれてしまっているので、大木田の図書館でしかお目にかかれないのが現状である。
- ANTONIN ARTAUD, *ŒUVRES COMPLÈTES 9*, Gallimard, 1971 & 1979, p. 1236
- iii *ibid.*, p. 130
- iv ルイス・キャロル、『新注 鏡の国のアリス』、高山宏訳、東京図書、1994年
- v LEWIS CARROLL, *Through and Looking Glass and what Alice found there*, PUFFIN CLASSICS, 1984, p. 102
- vi シル・ドゥルーズ、『精神分裂者と少女―『意味の論理学』から』、『ボリロコス2』、中山元編・訳、冬島舎、p. 242
- vii ARTAUD, *op. cit.*, p. 142
- viii ドゥルーズ、『前掲書』、p. 250、ちなみに *cahot* の部分はドゥルーズ

では *cahot* となっているが、おそらく脱字なので訂正しておく。

- ix ARTAUD, *op. cit.*, p. 169-172
- x *do. ibid.*, p. 130
- xi *do. ibid.*, p. 130
- xii *do. ibid.*, p. 130
- xiii *do. ibid.*, p. 128
- xiv *do. ibid.*, p. 130
- xv *do. ibid.*, p. 170
- xvi *do. ŒUVRES COMPLÈTES 1*, p. 100